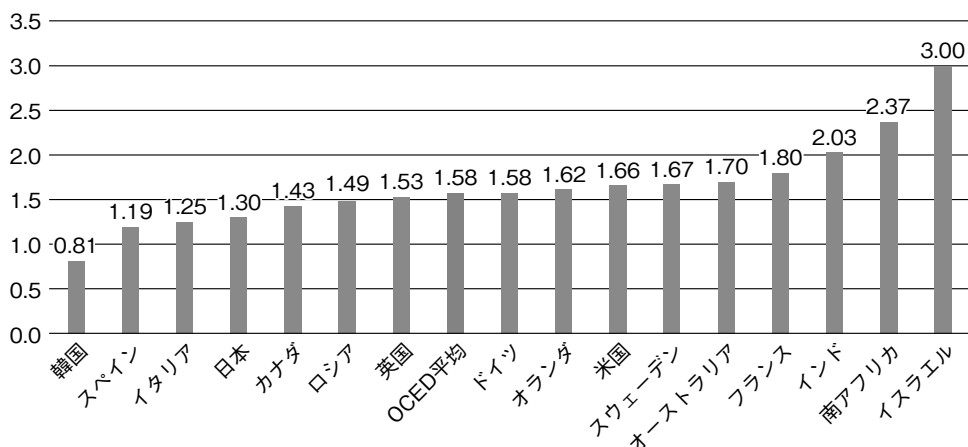


合計特殊出生率の国際比較（OECD）



OECDは加盟国の合計特殊出生率（1人の女性が生涯に産む子どもの推計人数）を調査している。最新の2021年のデータによると、OECD平均の1.58に比べ、1.0を切る韓国の落ち込みが目立つ。日本も1.30と決して高いとはいえない。なお、翌2022年の個別の調査では、韓国は0.78、日本は1.26と、両国ともに合計特殊出生率の過去最低を更新している。かつては出生率の低下に苦しんだフランス、スウェーデンは、少子化対策を国策に掲げ、その後、回復に転じた（現在は低下傾向）。先進国の出生率は低下しているが、世界的にみると人口は増加している。特にアフリカ諸国では出生率の高い国が多く、5.00を超える国も少なくない。

OECD「Labour Force Statistics」より作表